

ACNC News Letter

発行
特定非営利活動法人
あいち・子どもNPOセンター



〒460-0003 名古屋市中区錦3丁目2-3 2錦アक्सビル2階
TEL&FAX:(052)253-6398
e-mail:aichi-kodomo@mountain.ocn.ne.jp
HP: http://aichi-kodomo.sakura.ne.jp

「若者・外国人未来応援事業の現状とスタッフの学び」

特定非営利活動法人 あいち・子どもNPOセンター
理事 船橋理仁

今年度、理事に就任いたしました船橋理仁と申します。名古屋地区の若者・外国人未来応援事業で相談員を担当しております。

この事業は、高卒程度認定試験（高認）の合格を目指す方を中心に学習支援や日本語支援を行うもので、事業名や形態等の変更はありましたが今年で5年目となります。私は大学生の頃から本事業に関わり、現在は社会・生涯教育学領域の大学院生として学習支援の取り組みを研究対象としても捉えたいと考えています。

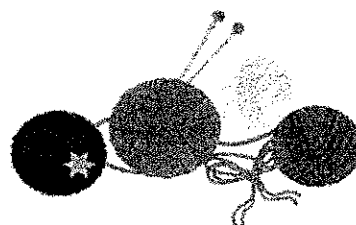
週2回の学習会には、これまで10代から70代まで幅広い世代の方が参加されてきました。そして、不登校や引きこもり、病気など様々な経験をされてきた方がいます。最近では、新型コロナの影響で職を失い、転職するために高認合格を目指そうとされる方もいらっしゃいました。参加される方のお話を伺っていると、この事業が社会の変化と大きく関わっていることを実感させられます。

このように書くと暗い学習会のイメージを持たれてしまうかもしれませんが、実際に参加される方は、自分のペースで前向きに学習に向き合おうとなさっています。高認の合格にはおよそ8科目の受験が必要ですが、1回の試験で全ての科目で合格できなくても、一度合格した科目は次回以降受験免除となります。こうした制度も踏まえ、「何のために、どのくらいの時間をかけて、合格を目指すのか」を自分で考えて決めることが非常に大切です。

学習会は、参加される方の状況や希望にあわせて将来の見通しを考えるキャリア支援としての役割も大きいです。

高校や大学も少しずつ多様化してきているものの、同じ世代が同じ課程で学び、その先の進路を一齐に決定していく流れは今も大きくは変わっていません。しかし、様々な世代や背景をもつ方が参加する学習会は、キャリアの多様性が必然的に認められる空間になっており、サポーターである私たちも、しばしば自身のキャリアや生き方を見直す機会になっています。

予算等を含めた事業としての持続性や、限られた資源や時間で行うことができるサポートの限界、他機関との連携等課題もありますが、「学びたい」と考えて会場を訪れた方の思いを原点とすることを忘れず、将来を意識した広い視野をもって学習をとらえ、サポートに関わっていきたいと考えています。



新型コロナウイルスと子どもの生活

伊藤浩明（あいち小児保健医療総合センター センター長）

2020年1月から国内で広がった新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナウイルスと言います）。流行の山が第1波から第5波まで押し寄せて、現在そのピークが一旦落ち着いた中でこの原稿を書いています。



人類の歴史の中で、感染症はしばしば全世界的に猛威を振るい、歴史の転換点を作ってきました。天然痘、コレラ、腸チフス、百日咳、麻疹、ポリオ、ジフテリア、猩紅熱、結核など、その例は枚挙に暇がありません。歴史上の重要人物でさえ、こうした病気で早世しました。もしそれがなかったら、人類の歴史はまた違ったものになっていたでしょう。

しかし人類は、こうした病気を知性で克服してきました。治療薬とワクチンの開発により、これらの病気は地球上から撲滅、又はほぼ姿を消しました。致命的な子どもの病気として恐れられた猩紅熱は、抗生物質（ペニシリン）の開発により溶連菌感染症という日常的な病気となり、検査によって瞬時に診断して簡単に治療できるようになりました。あたかも、人類の歴史は感染症を克服したかのように思われていました。

その中で未知のウイルスである新型コロナが発生した時、世界中が一斉に取った行動は、感染者の隔離、手洗いうがい、マスク、そして人と人との接触を断つ、という極めて原始的なものでした。江戸時代に麻疹が流行したときの対策と何ら変わらない光景が、世界中で見られました。個人的には、医学の進歩がこれほど脆いものだったのかと、愕然とした気持ちでした。しかし、これこそが、歴史から学んだ唯一無二の感染症対策なのです。

一方、その後のウイルスの解明とPCR検査の開発、ワクチン開発のスピードは、さすがに現代医学の力量を見せたと言えるでしょう。随分長い時間が経過したように感じますが、流行の始まりから1年以内に診断法が世界中に普及し、ワクチン生産まで到達しました。

現在、日本でもワクチンの2回接種率が国民の70%に達してきました。これにより、仮に感染者がひとりいたとしても、その人から感染をもらう人（実効再生算数といいますが）が平均1人にもならない、という状況がようやく生まれてきました。そうなれば、ウイルスを持っている人の数は

徐々に減少していき、いずれ流行は終結します。

ワクチンの安全性が、いろいろ問題視されています。mRNA ワクチンという全く新しい技術で作られたものなので、接種者が増えると共に予想外の副反応が見えてきたようです。しかし、ワクチンの安全性を考える時には、何もしない時と比べるのではなく、万一感染を受けた時のダメージと比較することが必要です。さらに、自分個人の問題だけでなく、自分が感染したときに周りに与える影響を想像することも大切です。最終的には、歴史上人類がウイルスに打ち勝つために、ワクチンは必要な手段です。

さて、新型コロナの流行の中で、子どもは比較的かかりにくく、重症化しないとされてきました。デルタ株になって大人と同等に感染を受けるようになりましたが、それでも重症化する子どもは極めて希で、むしろ無症状であることが知らない間に周囲にウイルスを広げるリスクになる、という状況です。私たちあいち小児センターでも、今年度から感染を受けた子どもの入院を受け入れています。これまで数十人の子どもが入院しましたが、その中でも強い治療が必要な重症者はほんのわずかです。

入院する子どもたちの本当の理由は、生活弱者です。社会的にギリギリの生活をしている家庭で、養育者が新型コロナに感染した場合、感染を受けた子どもの行き場がなくなって入院となるのです。

子どもたちが社会生活の中でどのような状況にあるかは、私が述べるまでもなく、読者の皆様が身に染みて実感されている通りでしょう。小さいうちから、人との接触を「悪いこと」のように擦り込まれた子どもたちをどう解放していくか、これから壮大な社会実験が始まります。

医療の立場からは、生まれて最初の 1~2 年間、徹底的に感染防御をしてカゼもひかずに過ごした子どもたちが、これから「生まれて初めて」のウイルスに次々と出会っていきます。すでにこの春~夏に RS ウイルスの大流行が見られたように、これから思いがけない感染症の広がりや、重症者が発生する可能性があります。子どもは、小さい時から適度に細菌やウイルスに出会い、免疫力を鍛えていく必要があります。私たち小児科医は、そうした目で今後の子どもたちに関わっていきたいと考えています。

